

令和6年度奈良市教育委員会施策評価懇談会の意見の概要	
開催日時	令和6年7月25日（木）午前10時から午後0時まで
開催場所	オンライン会議
意見等を求める内容等	<ul style="list-style-type: none"> ・意見交換 「アフターコロナの児童生徒の様子・変化など」 「ヤングケアラーの実態について」 ・外部評価者の質問・意見への対応の確認
参加者	<p>【外部評価者】仲林 真子 氏、橋崎 頼子 氏 【計2名】</p> <p>【教育委員】北谷雅人教育長、柳澤保徳委員、梅田真寿美委員 川村由加里委員、新井イスマイル委員 【計5名】</p> <p>【事務局】土田教育政策課長、小林課長補佐、楠田主任【計3名】</p>
開催形態	公開（傍聴人0人）
担当課	教育委員会事務局 教育政策課
意見等の内容の取り纏め	
<p>項目 No.1「教育委員会が管理・執行する事務」、項目 No.2「教育委員の活動」について内容確認の後、外部評価者と教育委員で意見交換を行った。</p> <p>《意見を求めた内容及びそれらに対する意見等》</p> <p>1. 外部評価者の質問・意見への対応の確認 項目 No.1「教育委員会が管理・執行する事務」、項目 No.2「教育委員の活動」について、質問・意見がないことを外部評価者に確認し、了承を得た。</p> <p>2. 意見交換</p> <p>【テーマ1】アフターコロナの児童生徒の様子・変化など (仲林評価者)</p> <p>ここ何年か、新型コロナウイルス感染症のことを、この場でも取り上げることが多い。様々な制限があり、学校生活への影響、改善の仕方など意見交換をしてきた。5 類への移行から1年以上が経ち、細かな制限が取れ、コロナ禍とその後の比較検討ができるようになったと思う。以前この場で、子どもたちにはその時にしかできないことがある、特に小学生の低学年ではそこでしか経験できないことがある、という話があった。私はそれが大変記憶に残っている。私は大学において、大分元通りに学生が元気に楽しそうにしているように見える一方で、人間関係のようなものがこの3年間でやや希薄になってきたと思うところもある。</p> <p>(梅田教育委員)</p> <p>アフターコロナの教育活動については、各学校が行事のあり方を見直し、儀式的な行事もできるだけ簡略化している。コロナ前に全て戻すのではなく、各学校におけるあり方をどうす</p>	

るかという動きが管理職の方のリーダーシップのもと進められていると思っている。コロナ禍の間、子どもたちにそれぞれの学年段階において経験して欲しいことが希薄であったことは事実であると思うが、今学校生活が日常に戻ってきている中で、先生方の指導の中身に応じて子どもたちもそれに応えようとしている。「生活調べアンケート」の間 10「困ったときに、学校の先生や家の人に頼ることができる」について、子どもたちの希求行動が、心理的に安定していくためにも、非常に大きな影響がある。それに対応するために、学校の先生方のきめ細かな関わりが、コロナ禍から非常に大きなものであった。そこがいい方向に向いているという分析は間違いない結果であろうと思う。しかし、頼ることが当たり前だと思っている子どもたちが増えている状況もあるのは感じている。子どもたち同士の間関係の持ち方や自らが動こうとする力について、学校の教育活動は今、探究的な活動を非常に多く盛り込んでいることで、そこに力を発揮してくれる児童生徒、学生が多くなってきていることは事実ではあると思う。一方で、自らをどのように向けていけばいいのか、難しい状況も非常にある。不登校については、非常に増えてきているという状況は、どの学校種においても今、あると思っている。私の勤めている学校法人の中に、通信教育に携わっている高校があり、爆発的にそのニーズが高まってきている。様々な学校種において、それぞれの学校段階で、どのような関わりをしていけばいいのかということを考えていくことは、欠くことができないことだと感じている。

(仲林評価者)

大学でも、学生が積極的じゃないわけではないが、どこか他人事感、自分のことだと思わないような対応をすると日々感じている。今の先生のお話と共通するところがあると感じた。

(北谷教育長)

「生活調べアンケート」は本当に貴重なデータを取れていると感じている。どの項目も休校中と学校再開、この時期の数字の変化は非常に大きい。休校が子どもたちに与えた影響は本当に大きい。コロナの分類が5類に移行してからも、学校では多くの子どもたちがマスクをしている実態があったが、こうしたときに特に自分で判断することが難しい低学年の児童たちには、大人が丁寧に発達段階に応じてわかりやすくコロナに対する正しい知識を教え、自分で判断ができるようになることが非常に大事であると認識したことがある。もう一つはコロナ以降、オンライン学習も普及したため、家での学びやフリースクールなど、多様な学び方を選択する子どもたちが増えてきているのではないのか。そういう多様な学び方をする子どもたちに、私たちがどう支援を行っていったらいいのかについても、コロナ禍を通しての大きな変化だったと感じる。

(仲林評価者)

発達がまだ十分ではない子どもたちにとって、3年間マスクだった影響がどれくらいあるのか懸念している。

(川村教育委員)

体育大会や運動会は平日開催が多くなって、授業参観の枠で短時間となって保護者には好評で、兄弟がいる家庭は子連れで行かなくても、体育大会、運動会を見られるのは、とてもいいという意見をよく聞く。
アフターコロナにおいて、学校に行き辛さを感じる子が、増えているなというのは、私の周

りのお子さんを見ていても思う。学校以外の選択肢も、奈良市はととも力を入れ、増えているのは心強いと思っている。先日出席した、市町村教育委員会研究協議会で、奈良市の公設フリースクールの説明をしたが、評価はととも高く、興味を持ってくださっていた。不登校のお子さんを持つ保護者の集まり「はぐくみ進路の集い」に参加した保護者からも、様々な良い感想を伺った。コロナが未来を背負う子どもたちにどれだけの影響を与えたのか。正解はない状態の中でよりよいものを、私たち大人がちゃんと作っていかないといけないと。私たち大人の取組が試されていると感じる。

(仲林評価者)

大学でも一気にオンライン授業が導入された。日本は遅れていると言われていたが、少しは諸外国に追いつけたのかなと思う。一方で、発達段階の子どもたちにとっては、対面とオンラインの違いには注意が必要だという研究も出てきている。対面か、オンラインか、絶対にどちらかというわけではなく、このコロナで得た知見も今後うまく生かしていけるようになってくるといいと思う。

(新井教育委員)

コロナのタイミングと、GIGA スクールのタイミングが一致して、一気に進んだのではないかなと思っている。IT は、選択肢として提供されるのは良いことだと思っている。リテラシー自体は必要な時にいつでも身に付くものと思っている。病欠の時でも授業を聞けるとか、何か聞きたい時に参加できるとか、そういうやり方はすごく見てよかったと思う。将来的には、もっと行動の蓄積がオンラインでできるようになれば、いろいろ分析ができると思っている。一方でオンラインと対面の違いというのは、科学的にはまだ難しいところもあると思う。AI は Web 上にあるたくさんのテキストをとにかく学習し、その人間活動をテキストや画像の世界だけを見て、人間ってこういうものだとか Web 上の世界で理解して、受け答えをしている。人間が AI に質問をすると、その質問のリテラシーによって、回答が変わってくる。うまく文章を作って質問ができる人に対しては、望む答えが返ってくるが、そうではない場合は望む答えが返ってこない。これがなぜ起こるかということ、結局、AI が文章でしか理解をしていない、その相手の意図を理解しない、学習できる内容が文字と画像しかない状態なのがそうなる理由である。人間と会話するときには、感情、表現、その表情など、文脈やなぜ今その会話をしているのか、なぜ人が集まっているのかとか、そういった情報も含めて回答が適切にされている。入ってきた文字だけで、文字の順序で、ある程度文脈を理解できるようになったのが最近の AI の進化ではあるが、本当はそれ以外のいろんなモードも認識しないといけない。本当に人間らしい回答にはまだまだ到達できていない。子どもの年齢が低い時に、取り入れられる情報が限られている環境でずっと育ち続けると、やっぱりそういう他のモードの情報、絵を認知できず、本、画面だけで見て対応すると、たとえば相手が怒っていることをうまく読み取れないとか、自分が危険だと感じられない、そういうところでミスコミュニケーションが出てきているのが、オンラインでのトラブルだと思う。そういったものを学習しようと思うと、まだまだオンラインの情報というのは限られている。心拍数とか、温度とかいろんなものがどんどんデジタルに入っていくと、将来的にはそういうものも再現でき、オンラインでも同じような体験ができるようになるかもしれないが、現状の今のデジタル技術だとそこまではいっていない。教室という場所も、人が集まるというのは、ある意味とても贅沢なことで、そういった環境が維持できるのは、まだまだ理想的なことだと思う。オンライン授業、HOP、バーチャル HOP など様々な選択肢が用意、検討されていると感じている。

(仲林評価者)

教室でみんなと場を共有することで、脳波が同期して理解が早く進むのではないかとといった研究もあり、非常に興味深い。

(柳澤教育委員)

多様な学びが ICT の進展によって可能になったこと、コロナによって自宅で過ごすことが多くなったことから、多様な教育、多様な学びに目を向けるようになったと思う。社会の中でも、働き方も含めて、それぞれの世代がどのようにコロナの影響を受けたかというのは社会科学的にきちんと研究すべきテーマだと思う。コロナの中で、先生方がどういう風に変ったのか、ICT が苦手な先生方も、ICT を受容する中でどう変わっていったのか。その中で、本来の一斉授業型以外の学びの形に、先生方がどういう価値観を持っておられるのか大変気になった。熱中症の問題があって、常時フルオープンで学校が授業を展開できるとは限らないときに、むしろハイブリッドを前提としたような学びの形に、それをサポートする事務局がしっかりする必要がある。そういう点で働き方改革とかなりリンクしているが、その辺が働き方改革の具体的な指針等で見えてないので気になった。子どもたちのアフターフォローは、今の中学生が大学を卒業するまで、つまり高校大学教育で、この問題は先ほど対面型が欠けており、共感性が欠けているのではないかと、高校大学段階で、学生諸君にしっかりと問題提起をして学び合いを続けられたらいいのでは。小学校の責任ではないので、その辺は中等高等教育の段階の責任があるのだろうなと思った。

(橋崎評価者)

学校へ通うことの難しさの代替案が、いろいろコロナの中でできているのだと先生方のお話聞いて感じた。そこへアクセスする方法を、子どもたち自身が学校の中で学ぶ中で、様々な選択肢があることを知り、自分でその選択肢を掴んでいくような働きかけが大事だと思った。もう一つは、先程梅田委員がおっしゃった「教師のきめ細かな関わり」について、内省的で、心の動きに敏感な大学生が増えているように感じる。一方で、それを外へ向けていくというのが大学の役割だと、柳澤委員のお話を聞いて感じた。

(仲林評価者)

大学生が活発になって外に行くのはいいが、健全な形で外向きに活発に出て行って欲しいというところは、大きな宿題だと思っている。

【テーマ2】ヤングケアラーの実態について

(仲林評価者)

「ヤングケアラー」と一言で言っても、どれぐらいの年齢の子どもたちに起きているのかということで、いろいろと影響は違うと思う。相談があったうちの2件は18歳以上であったとのことで、もちろん18歳であればいいという話ではないが、10歳の子が家族の世話をするというところはまた少し位置付けも違うと思う。現状と所感、こんなふうになればいいかもしれないとか、こんなふうにしたら見つけてあげることができる、気にしてあげることができるというような観点でご意見をいただきたいと思っている。

(北谷教育長)

教育委員会でも、令和3年度から奈良市立小学校の5年生から高校3年生までを対象に、アンケート及び各先生方の研修をしている。昨年度の調査では、「日常的に家庭や家族のお世話をしていますか」という質問に対しては、小学生では17.7%。中学生では13.3%の生徒たちが「はい」と、答えているが、「はい」と回答したものの中には、食事の準備や掃除、洗濯のお手伝いなど比較的軽度なものが含まれている。ヤングケアラーについては、お手伝いと線引きが難しいことや、逆にケアをしている子どもたちが「やりがい」を感じているケースがあるなど、一律に、「はい」と答えた児童生徒が、ヤングケアラーであると捉えるのは難しいと考える。そのためにアンケートの結果については、各学校でそれぞれの子どもたちの回答結果をフィードバックして、注意深く先生方に見守っていただくよう、また、気になる子どもたちには、担当課に情報の提供をいただくように、常に連携をしているところ。ヤングケアラーについては、児童虐待におけるネグレクトに該当するという疑いもあることから、学校が把握した状況や、市教委が得た情報などは、常に奈良市子どもセンターと情報を共有しながら、日々子どもたちの活動を注意深く見守っているところ。

(仲林評価者)

数字については、これがもし「お手伝い」ということではなくて、本当にケアをしているという数字であればかなり驚きの大きい数字だと感じるが、ヤングケアラーの定義は、教育の現場では何かあるのか。

(北谷教育長)

ヤングケアラーの定義は、「家族の介護その他の日常生活上の世話を過度に行っていると認められる子ども・若者」である。そういった子ども、若者を自治体がしっかり認定をして、支援に当たるが、「過度な」という定義をどう捉えるのかだと思う。子どもの負担になっている、そのことで学習を受ける権利などが保障されていないことは、看過できないと考えている。

(仲林評価者)

「過度に」の判断もいろいろ分かれるが、おそらく、「気づかない」ということも多いのではないかと想像する。ヤングケアラーは、ネグレクトの問題も関連するというお話があり、通常通り学校に来ていても、ちょっと洋服が汚れているとか、或いはあまり衛生的ではない、そういったことから気づくようなこともあるのか。

(梅田教育委員)

子どもたちの状況に気がつくのは、宿題忘れ、様々なものの準備ができていない、子どもの衣服の状況、保護者の方と連絡を取りたくてもなかなか取れないなど、細かな日常的な観察から気がついていく。気がついたことを、学校が虐待についての報告をどのような形で動かせるかという話にもなり、福祉サイドといかに連携して、ケース会議を関係者でしっかり持って、いかに速やかに対応をしていけるかということは、非常に重要なことだと思っている。掴むことの難しさは確かにあると思う。

(川村教育委員)

子どもとの関係性、先生の気持ちのゆとり、ヤングケアラーに関連する知識、それらが揃って、気づける回数頻度も増えるのであろうというのは感じる。しかし先生はあくまでファーストステップであって、その次につなげることが大切。奈良市は子どもセンターがある。そ

こでどこまで連携して、守秘義務を守りながらも情報共有をして、切れ目ない支援を、子どもの人権が守られるように、本人が未来を思い描けるような環境を整えてあげられるか。先日七夕の笹飾りのため小学校の体育館にお手伝いに行った際にも、短冊に子どもたちの切実な願いが書かれていたものがあった。それを地域や保護者たちが見つけてあげて先生に相談したり、先生以外の大人が学校園に入って、子どもたちを見守って先生に情報提供したりするのも、もっと必要なのかなと思う。また、メタバース等も使いながら、子どもたちの悩みが少しでも吐露できるようなものが、SNS であつたりネットであつたり、子どもが心に積ったものを吐き出せるような場が必要だと思う。

(柳澤教育委員)

不登校、虐待、ネグレクト、ヤングケアラー等、様々な課題を先生方1人では解決できないので、子どもセンターとの連携、スクールソーシャルワーカーをそれぞれの学校もしくは何校か掛け持ちして配置するなどし、先生方或いは教頭先生、校長先生が専門家に相談できるルートが整うといいと思う。責任逃れというわけではなく、シェアしながら役割を切り分けて対応ができるといいなと感じた。

(仲林評価者)

子どもも大変だが、先生も1人で何もかも引き受けるとなると、本当に負担になる。クラスに対象の子どもが複数いる可能性もある。それでなくともオンラインの仕事が増えたりして先生のご苦労がある中で、大変だと感じる。

(新井教育委員)

ヤングケアラーは、学校で解決するものでもない側面があり、社会保障の設計で足りてなかったことが露呈したところがある。行政の大きい範囲でいろいろ対応されるものと思う。その気づける一つの現場として、学校があるという位置付け程度と思っている。ヤングケアラーという一つの問題があることを先生方がまず理解され、それに対する解決方法を把握していることが大事なので、研修等でしっかり対応されていると思っている。子どもにアプローチすると、家族のことに對してそんなに干渉して欲しくないというような反応が出ているというのは、報道番組を見ても感じるどころがあり、本当に求めているのは、同じような問題を抱えている人同士で、それが正常なのか異常なのかというのがきちんと判断、共有でき、それを解決する窓口にたどり着けるかということだと思う。事例等を学校で紹介できるか、道徳のような科目で提供するのか、総合学習の中でテーマとして取り上げるのか、自然に誰もがそういう社会問題について認知する状況認識ができる状態になることが、学校としてできることではないかと感じた。

(仲林評価者)

懸念されるのは子どもたちにとっていわゆる共依存のような関係について、不適切な関係だけど、それが当たり前になって、「私がいなくてお母さんが」とか「私がやっただけでいい」とというような気持ちを持つようになる。それが軽ければ、やりがいになるかもしれないが、そこが行き過ぎると、自分がなくなってしまうというようなことになると、それは良くないと感じる。

(橋崎評価者)

周りの大人がどう関わるか、連携しながら支えていくということが重要だと感じた。委員の

お話の中で、子どもの権利というのが繰り返して出てきていた。奈良市として人権教育に力を入れているので、子どもたちが自分の学ぶ権利や安心して暮らす権利などを学びながら SOS につなげていけるようになるということも大事だと思う。

(北谷教育長)

これからの子どもたちをしっかりと見ていく。学び方も、教員の教え方も、これから令和の日本型学校教育と言われているように、子どもの自主的な学びにしっかりと目を向けていくためのサポートを行い、ICT も活用しながらやっていく必要がある。

ヤングケアラー、不登校等と例を上げていくと、教員が抱える課題は本当に膨大である。何を切り分けて、どこまで専門部門につなげるのか、この機会に今日ご意見いただいたところを含めて、施策をしっかりとやっていきたいと思っている。

(事務局)

仲林先生におかれましては、今年度限りで本施策評価の評価者を退任されるご意向です。北谷教育長よりご挨拶いたします。

(北谷教育長)

仲林先生におかれましては、当懇談会の評価者として、平成 25 年から今年度まで 11 年の間、本市の教育施策について客観性や公平性をみていただきながら評価いただきました。本当にありがとうございました。

これから社会の背景や求められる時代の要請が大きく変わっていき、不透明な時代と言われる中であっても、子どもたちが自ら考えて判断しながら、自分にとって最適な人生が送れるような教育行政を、ここにいらっしゃる教育委員の皆様とも力を合わせて進めていきたいと思えます。仲林先生には今後も本市の教育行政にご支援いただければと思います。本当に長い間ご尽力いただき、ありがとうございました。

(仲林評価者)

お言葉をいただきありがとうございます。

11 年にもなるのかという思いです。当初は私自身現場のことを知らずに関わらせていただき、しかし自分でも興味を持って、思いがけず大学の方では学生部をやるようにもなり、その中でこの場で皆様のいろんなお話をお聞きしたことが、非常に私の中で勉強になって生かされたと思っています。自分の仕事にも大きな影響があったと思っており、大変感謝申し上げます。貴重な経験をさせていただきました。ありがとうございました。

評価シート「(3) 教育委員会が管理・執行を教育長に委任する事務」について、外部評価者から事前に質問意見のあった評価シート及び評価シート全体に対する意見聴取を行った。

施策評価全体について

(仲林評価者)

過去の施策評価に比べて数字が非常に良くなったと思っている。今回特にそこが一段と整理されたという感想を持っている。

(橋崎評価者)

各施策の ABCD 評価の付け方について、課によって少し違いがあるように思う。参考資料として、評価の根拠の数字が示されている箇所とそうでない箇所がある。意欲的な取り組みをされているので、ぜひ、根拠の数字を統一で入れていただきたいと思う。

項目 No. 5 「探究学習」

5-1 高等学校教育振興事務経費

(仲林評価者)

発展的、先進的な研究を学ぶ機会が、探究学習の中であるというような事業だったと思う。発展的・先進的な研究を学ぶことは、身近な社会問題を解決する力につながっていくという視点を持って取り組むといいのではないかと思う。

項目 No. 9 「グローバルな社会で活躍する人材の育成」

9-2 一条高等学校での取組 (海外留学等)

(橋崎評価者)

色々な留学派遣先があり、そこでは必ずしも英語だけではない言語が話されているので、それらの言語を対象として学習するというのも考えてもよいのではと思った。国際交流の最初のツールとして、国際共通語である英語教育に重点を置いているという説明は承知した。

項目 No. 12 「小中一貫教育、中高一貫教育」

12-1 小中一貫教育推進事業経費

(仲林評価者)

小中一貫教育の導入から一定の時間が経ち、一貫教育にしたことで起きた変化をエビデンスとして記録し、次に生かしてもらいたい。良い変化はもちろん、例えば不登校が増えたとか、人間関係が濃くなったことによって弊害のようなものはないのか等、懸念するところもあるので、検証は今後行っていった方がよいのではないか。

項目 No. 20 「不登校児童生徒への支援」

20-1 不登校児童生徒への支援

(橋崎評価者)

校内フリースクールは、学校と近い場にあるフリースクールであるため、結局校内フリースクールにも通えなくなる状況はないのかなと感じた。取組の拡充の際に様々な視点から検証していくことは必要であると思う。